

滋賀県立近代美術館協議会(第45回)概要

1 開催日時：平成30年(2018年)3月26日(月)午後3時00分～午後4時30分

2 開催場所：滋賀県大津合同庁舎7-A 会議室

3 出席者：

協議会委員 12名

上野委員、安達委員、神田委員、佐渡委員、澤野委員、島委員、千速委員、前川委員、柳原委員(会長)、十倉委員、松本委員、吉野委員(50音順)

事務局

桂田館長、相井副館長、村田県民生活部管理監(文化担当)

田島文化振興課長 田村新生美術館整備室長、他3名

4 概要

- (1) 平成29年度事業実績について
(資料1により事務局より説明)
- (2) 平成30年度事業計画について
(資料2により事務局より説明)

【委員からの意見等】

(委員)

実際に「美の糸ロートにどぼん！2017」に参加して感じたこと。参加者にアートを体験してもらおうというのが本来の目的だと思うが、小さい子どもを連れていったので、食事とかトイレの案内がもう少しわかりやすくあればありがたかった。

アートに関しては、子どもと一緒にとても楽しく参加できた。非日常的な体験が、子どもにとっては、絵本を見たりするよりは印象に残るのではないかと感じた。

(委員)

平成29年度に中村貞以の作品をたくさん寄贈されて、収蔵品となるのはありがたい。

(委員)

中村貞以のまとまった作品が20点以上もこの美術館に入るということは、有意義なことだと思う。

(委員)

学校出前授業プログラムについて。非常にいい試みだと思うし、これからもやっていただきたいと思うのだが、実際に学校から話を聞くと、先生は大変忙しくて、引き受けるのが大変だということも聞いている。平成30年度に80校実施予定というのは、新しいところなのか。それとも、今年度もやったところなのか。

平成29年度の目標が60校のところ、2月末時点で55校というのは、現場はかなり渋っているのではないかという気がする。

そんななかで、美術教育の風を外から吹き込むというのは難しいことだと思うが、先生の負担になってもいけないし。そのあたりはどういうことを工夫されているのか聞きたい。
(事務局)

平成 30 年度は年間 80 校を予定している。去年もしたが、同じ 4 年生が対象でも、また 1 年たてば違う 4 年生の子どもたちになるので、今年もしてほしいという学校もある。

初めて申し込まれる学校の 2 週間ほど後に昨年度も応募いただいた学校の受付をするように、募集については 2 段階方式を取らせていただく予定である。

現場は大変だろうということだが、できるだけ学校の先生の負担にならないように、材料は全部持っていく、ものによっては、少し費用をご負担いただく場合もあるのだが、何も準備をしていただかなくてもいいように、こちらで全部準備して、学校に受け入れていただいている。

また、学校の授業で使っていただいているので、希望が多い時期はある程度決まっている。日時が重なったりする場合は、そこは調整しながら進めさせていただいているところだ。

(委員)

学校現場から何かこのプログラムの生かし方とかを聞いているか。

これだけして、ああよかったねと済んでいるのか、そのあと生かしておられるのか、そのあたりはどうか。

(事務局)

小学校の場合だと、ワークショップが終わっても、あのときはこんなことしたね、あんなことしたね、楽しかったねというようなことを、雑談のなかで子どもたちがしていることをアンケートに多く書かれているので、子ども達には、非常に印象が強く残るのではないかと考えている。

できるだけ多くの学校に機会を持っていただきたいということで、今は 1 校あたり年 1 回だけにさせていただいている。

(委員)

平成 30 年度の事業計画に、若手作家作品制作展示等地域交流事業という新規事業があって、これはとても魅力的な試みではないかと思う。どれくらいの若手かはわからないが、もし、いいものがあった場合は、作品の購入や寄贈も考えてもらいたい。

公立、私立を問わず、どこの美術館も大体 90 年代半ば以降から収集予算がほぼゼロになっている。金額はわずかでもいいので、滋賀県ゆかりの若手作家で、これとは思われる作品があれば、例えば 1 点だけは何とか購入して、あとは寄贈してもらおうとか、いろんな方法があるかと思うのだが、せっかくの機会なので、そういったことも検討していただきたい。

(委員)

平成 29 年度に首都圏でも「美の滋賀」講座が開催されたが、新生美術館になった場合でも立地アクセスは変わらないので、遠方からのツーリズムというかたちで美術館に巻き込んでいくためには、やはり大きな視点がいるかなと思う。参加人数はたいしたことないかもしれないが、将来的な首都圏等からの集客を地道に狙っているのは、いいことだと感じている。

(委員)

平成 30 年度に琵琶湖博物館で出張展示をして、それも子ども連れを中心とするファミリー層をターゲットにしている。

もう一つの新規事業である若手作家地域交流事業も、地域の子育て世帯にも発信して、美術にいろいろと身近に感じていただいて、新生美術館にも足を運びたいなというように感じてもらう場を考えておられるということなので、大変素晴らしいと思った。

(委員)

学校出前講座は小学校ばかりか。

(事務局)

主に小学校だが中学校にも出向いている。

(委員)

小学校と中学校や高校とでは、随分とニーズが違う部分があるのかなと思うが、高校でもすでに外部と連携して授業を実施しているところもあり、そのようなプログラムが、小学校だけではなくて、中学校や高校まで連続的に広がっていけばよいと思う。

(委員)

どちらかというとならば理数系科目の方が大事だということで、芸術系の履修単位数が減ってきている状況で、こういうふうにかつては小さいときからアートに触れる機会をつくるというのは、人間形成において大事な事ではないかと思っている。

先日、世界の有名なビジネスリーダーは、なぜ美意識を大事にするかというような内容の本を読んだ。かつてはアメリカでも経営管理に長けた人ばかり会社は採っていたが、今はちょっと流れが変わって、美意識とか文化に対して哲学を持っているような人も、会社のなかで求められているとのこと。

社会のなかで文化というのは非常に大事だと思うし、こうやって美術館が頑張っているのはありがたいと思っている。

(委員)

自分自身が美術館のサポーターをしていた経験から言うと、来年度予定している学校出前講座の 80 校というのは、すごい数だなと思う。

志高くボランティアに応募される方々が多いと思うので、その育成であるとか、(サポーターが会場に出向いたときの) 交通費は出ると聞いているので、予算等での制約もあるかと思うが、そういうところの充実も考えてもらえれば、きつともっといい取組になるのではないかと思う。

(委員)

もう少し海外に視野を向けてもいいのかなと。京都まではたくさん世界中から観光客が来ている。しかしながら、例えば大津絵を見に、山一つ越えて来てくれないのが現状だ。

滋賀県には日本でも有数の仏教美術もあるし、近代美術館がたずさわってきたモダニズムの拠点もある。アール・ブリュットもやっている。

そういうところでこの「美の滋賀」を、もっと海外に計画的に発信して、入館者の何割かは海外からのお客さんだというようなかたちになれば、活性化するのではないかと話を聞いていて思った。

(3) 新生美術館整備の現況について
(資料3により事務局より説明)

【委員からの意見等】

(委員)

今後の対応について肝心なことだと思うのだが、全体事業費の47億円について柔軟に対応するのか、それともやはり遵守するのか。予算枠の話が足かせになっているので、自分としては柔軟にやってほしい。コンセプトを大事にするのならば、それを多少超えても、資金を民間から集めるための方策を考えたら良い。

47億円に足を取られてにっちもさっちもいかないというのは、どうかと思う。

(事務局)

美術館にどういった機能を持たせるのかということを検討するのが大事だと思っており、そこをもう少し議論したいと考えている。それに基づいて事業費についても、またいろいろと御意見があるかと思うが、議論していきたい。

(委員)

その議論の過程で、47億円の枠をはみ出しても一応検討はしていくということによいのか。

(事務局)

今まで47億円遵守と言っているので、基本はそこだろうと考えている。ただ、個別の意見聴取等をおこなっているなかで、もう少し考えたらどうだという意見はいただいている。

(委員)

非常に重要なところだと思う。

(委員)

コミッションワークについて。4作品を特定のアーティストに依頼して、建築と同時に検討されるということだが、これは今どのような状況になっているのか。

(事務局)

平成29年7月に提案書の提出を依頼する候補作家4人を決めたのだが、その翌月に建築工事の入札が不落になった。コミッションワークは建物と密接に関連しているため、候補作家を選ぶまででいったんストップしている。

本来だと候補作家から提案書をいただいて、その提案書に基づいて作家を選定するというプロセスを踏むはずだったが、今は延期になっている。

(委員)

美術館は、まずこういうふうなものであってほしいというのがあって、いつ誰と行っても居心地の良い場所にしていただきたいと思っている。

年齢、状況、環境などいろいろと違うのだが、誰もががついつい長居してしまったという感想を持てるような、そんな場所にしてほしいなと思っている。

電車なり車で行くにしても時間がかかるので、交通アクセスをもうちょっと充実していただくと、行きやすくなるのではないかと思う。

(事務局)

交通アクセスについて説明すると、今は県道のところにバス停があるのだが、県道を渡って、北駐車場の近辺にバス停を持ってこようと考えている。新しいエントランスができると、時間が随分短縮され、それまでの間をバリアフリー化して、ベビーカー等も押しやすいような形にしていきたいと考えている。

(委員)

県行政のなかで、観光・文化事業としての美術館というような位置づけで考えると、もっと柔軟で楽しい面白いものができるのではないか。

やはり数十億円も掛けるわけだから、それこそ世界にも発信して恥ずかしくないような美術館、日本のなかでは絶対注目を浴びるような美術館にしないといけないと思う。単に規模の大ききだけでなく、内容的にそういったものを目指さないと駄目なんじゃないかなと思う。

最近オープンした美術館のなかに、有名なレストランを入れたりして、話題性をつくっている。

そういう観光とかで楽しみのあるものにしていけないではないかと思う

美術だけを正面に据えるよりも、あまり関係のない人でも、ちょっと時間つぶしにでも行こうかぐらいのものになるといいなと思う。

(委員)

京都までは本当に海外からたくさん観光客が来ている。それをもう一山越えてもらう。コンテンツはあると思う。

滋賀県というのは仏教美術については、日本で一番大事な場所の一つだから、まずそれをきちんと海外に発信できれば、来ていただけるだろうし、モダニズムのアートもきちんと根付いているし、アール・ブリュットも育っている。それをきちんと海外に発信していくと、関空を降りたらまず一番に滋賀の新生美術館に行ってみようということは、十分考えられると思う。

あともう一つは、やはり図書館との連携というのが重要だと思う。首都圏の美術館は図書室が充実しているし、アトライブラリーズコンソーシアムというネットワークを組んでいて、インターネットで横断検索できるようになっている。首都圏で美術を勉強している学生は、展覧会に行くのと同時に、その前後は図書室に行ってお勉強している。

関西からはアーティストは育つが、デザイナーはなかなか育たないと思う。なぜかという、デザイナーはリサーチ力がないと駄目なので、首都圏の芸大生というのは図書館を使う習慣を持っているからなのかなと思うと、ちょっと寂しい。

滋賀県の場合は図書館が隣にあるので、うまく連携すれば美術図書館としても活用できるわけだから、そこを補強していくと、もっとリサーチ力のあるデザイナーが関西からも育つのではないか。

(委員)

日本の文化予算（国家予算に占める割合）は、フランスと比べると10分の1で寂しい話だ。

仏教美術に関しても京都や奈良に負けないようなものがせつかくあるし、これは何とかしてもらいたいという思いが前からあった。

最初のコンセプトを壊してまで、47億円でこだわらない方がよいのではないか。

お金の集め方を考えると、もっと県議会にアピールするとか、あるいはトップダウンで何とかしてもらおうとか。

(委員)

飲食機能というのは、現状ではなくなるということなのか。

(事務局)

9月議会に出した案では、飲食機能については情報交流棟に設けるとしていたので、いったんはなくすという判断をした。

ただ、今回いろいろと意見聴取をすると、回遊型の施設ということで歩き回ると疲れる、やはり休憩スペース、カフェは必要だという意見が大多数だった。

そのあたりについては、設計を見直して、何らかの機能は確保したいと考えている

(委員)

そこは外せないところではないかと思う。

他の委員が言われたように、なるべく長くいたいし、いてもらいたいと思っておられる方が多いと思うので、フードというのは切り離せないと思う。ぜひ検討いただきたい。

(委員)

やはり現実的には、県のほうが予算を増やすか、あるいは募金をつのるのか、どちらしかないと思う。コンセプトを変えたりレストランをなくしたりというのは、自分も個別に意見聴取を受けたときに大反対した。

あんな周りに店が何もない所で、そこに人に来てくださいと言っても、レストランとかなければ、来ないと思う。

展覧会だけに興味のある人が見てきて、それでおしまいというのでは、47億円の値打ちがないと思う。本当に広く一般の人が来るものにしないと、47億円を無駄遣いしてしまうことになる。一番もったいない使い方になってしまうのではないかなと思う。